

厚くて薄い壁

石川県立金沢二水高等学校 二年 村田真衣子

狭い日本から見えていた開発途上国の現実。それはほんの一面にすぎなかった。自分が理解していると思っていた以上に大きな問題を抱え、そして解決しようと努力している。そんな人々に、十六歳の私は家を建ててあげたり、病気を治してあげられる力は何一つない。しかし、こんな未熟な私でも何か貢献できることがあるのではないか、いや、少しでも貢献できるはずだと思う。

私は三月に中国へ行くチャンスをいただいた。そして、現地の同世代の学生と交流することができた。初めての海外研修は、多くの驚きと感動を与えてくれ、

そして私を大きく成長させてくれた。正直、中国へ行く前はたくさんの不安があった。言葉の壁はもちろん、私たち日本人をどのように考えているのか、どのように接すれば日本人の良さをアピールできるのだろうか、と。しかしそんな余計な考え方はすぐに吹き飛んでいった。中国の人たちは皆やさしく、異国人の私たちを大いに歓迎してくれた。そして、片言の言葉も最後まで理解しようと一生懸命努めてくれた。住んでいる場所は全然違う所でも、人を思う気持ち、人を包み込む優しさは同じなのだと深く感じた。国と国との間につくられた偏見は、私たちが勝手に一部の情報から想像してつくりあげた厚いようで薄い壁だった。私は、この事実を壁の外側で見ている人たちに伝え、そしてこの壁を破りたい。皆同じ気持ちを持ち、平和という同じ希望を持つ人間だという事を分かってもらえるように。

壁の向こうには私たちと同じ人間がいた。同じ考えを持つ人もいた。実際にその人たちと話してみても、考えを交換することによって分かった事実であった。

開発途上国の人は援助をしてもらったら、「ありがとう」とたくさん言うだろう。そして援助した側は「ありがとう」という感謝を期待するに違いない。だが、考えてみると皆同じ人間、対等な立場だ。困っている人がいたら、手を差し伸べ

ることは当たり前なことではないだろうか。だから、私は援助される側の人々に「ありがとう」ばかり言わせたくない。「可哀相な立場」ということを自動的につくくり上げてしまうことにながってしまおうと思う。そのことは援助される側に少しも思わせたくないし、感じさせたくない。そうできた時、本来持つべき「協力」という意味を示せるのではないだろうか。国境にある壁が破れ、人々が平等に暮らせるまでこの気持ちを持ち続けていたい。

developed countries に対して developing countries という言葉があるが、世界はみんな developing countries であるのだ。発展してしまった国などない。みんなそれぞれに頑張って発展を続けているのだ。developed countries が他の国を developing countries と呼ぶのはうぬづばれに過ぎない。

developing countries か more developing countries のどちらかなのだ。

「活動すること」とは若者が考えを変えることなのだ。発展途上国という考えを捨て、共に発展している国同士であるという考えを持ち、すべての人が悲しまないで暮らせるような世界を作るために、皆同じ立場として力を合わせる。これこそが国際協力であることを理解しなければならぬのだ。それができた時に初めて私が中国へ行った意義が見いだせるのだと思う。

中国から帰ってきた今は developing countries に対して「何かできるはずだ」ではなく、more developing countries は「共に何かを作り上げていかなければならない」という気持ちにかわっている。

偏見という壁を打ち破り、世界の人間が皆同じであるという事実に気がついた時、初めて真の国際協力ができるのではないだろうか。自分ができる小さなことでも精一杯して、皆と幸せを分かち合いたい。すべての人が笑顔で暮らせる日を願いながら…。